

人の子はまた来る

マルコによる福音 13:24-32

(そのとき、イエスは弟子たちに言われた。)

「それらの日には、このような苦難の後、

太陽は暗くなり、

月は光を放たず、

星は空から落ち、

天体は揺り動かされる。

そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見ると、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。

いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。はっきり言っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」

説教

教会の暦では年間最期の三つの主日（第 32、33、王であるキリストの祭日）は「終末主日」と呼ばれています。

「世の終わりは救いの完成」つまり、終末は終わりではなく完成だとキリスト教では考えられていて、終末は恐ろしい日ではなく喜びの日です。ふつうは世の終わり、世界の終わりは滅亡で忌まわしいものですが、救いの完成、キリストの再臨のとき、それが主の日だ、という考え方です。キリスト教の伝統のないところで生まれ育っているわたしたちにはわかりにくいところで

もあります。

マルコの13章は別名、小黙示録といわれます。（大黙示録は新約聖書の一番最後にあるヨハネの黙示録です）黙示録（もくしろく）はギリシア語ではアポカリプス、「覆いを取り去る」「隠されていたものが明らかにされる」という意味です。啓示、預言と同じような内容ですが、特に終末についての啓示・預言を黙示と呼んでいます。

マルコ福音はその終末の様子を簡潔にこう述べています。

「それらの日には、このような苦難の後、／太陽は暗くなり、／月は光を放たず、星は空から落ち、／天体は揺り動かされる。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」

マルコ 13:24-27

「それらの日には、このような苦難の後」とはマルコの13章前半に書いてある内容で、神殿は崩壊し、天変地異がおこり、大弾圧がおき、にせ預言者が出沒する、そうなったら逃げろ、この苦難の日々は主が縮めてくださる。にせキリストに惑わされることなく逃げて人の子の出現を待て、ということが記録されています。世界的な規模の破壊につづき宇宙的な規模で崩壊がおき、その後「人の子」キリストが雲に乗ってやってきて選ばれた人々に救いをもたらす、聖書は終末預言＝黙示をこのように語っています。

実際の人生で「オチ」を体験することはめったにありません。入学、卒業、就職など節目、節目はあることはありますが、なんとなく終わったような気がして、またなんとなく続くというのが実際の人生「オチ」らしい「オチ」もなく平々凡々と続いていくのが凡人の人生じゃないでしょうか。

しかし、聖書は「オチ」として黙示録を用意しています。この世に「オチ」として黙示録があると考えると、終末を語りつぎ、黙示を信じる人々がいるということはおおきな慰めになります。結末に黙示録があるのなら、世界が終わるときもまんざら悪いものではないなと思います。わたしたち一人ひと

りが主の恵みとして黙示録を受け取ることができますように。
